

“昭和” S Pレコードで辯れば

アメリカ大衆文化を愛した戦前の日本人

S Pレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

中学生の頃にたまたま蓄音器といふものに出会い、それがきっかけとなって戦前の日本の歌謡曲を中心に七十八回転のいわゆる「S Pレコード」を集めようになつた。それから二年近くになるが、その数を数えてみると一千枚を優に越えている。そこで、自分が集めたレコードを発売年月ごとに整理し、当時の政治、経済、社会、文化における主な動きを、歴史書や年表を開いて照らし合わせてみると、歌詞や曲調に、その時代を支配していた空気や世相のようものが反映されていることを改めて実感した。そもそものはず、

テレビもインターネットも無かつた当時、レコードは新聞、雑誌、ラジオ、映画と並んで最新の情報発信源であつたのである。

当時のレコードの作詞、作曲者が大衆に対して発信しようとしているメッセージのようなものに接すると、時折はつとさせられることがある。戦後多くの日本人が忘れてしまつた、乃至半ば忘れる強要された、「精神のあり方」がたつた一片の歌詞の中に凝縮されており、それが五十年以上前の時空を越えて蘇つてくることがあるからである。

(二)

昭和四十年生まれの筆者が中

学、高校時代を通じて受けた歴史教育では、戦前という時代は天皇陛下を頂点とするファシズム体制であり、戦後になつてはじめて国民が自由と民主主義を謳歌するようになつたかのごとく教えられた。戦前とはそんなに暗黒の時代であつたのだろうか。こうした「戦前」「悪」「戦後」「善」といった割り切り方をしながら、この国の歴史教育には疑問を抱かざるを得ない。時

代の証言者としてのレコードを本調の歌謡曲、民謡、小唄などと並んで昭和三年から昭和十二年頃まではいわゆる欧米調のバタ臭いポピュラー・ソングやジャズ・ソングが花盛りであった。昭和十二年七月の蘆溝橋事件頃から「勝つてくるぞと勇ましく誓つて故郷くにを出たからは…」で始まる「露宮の歌」や「爱国行進曲」が大いに流行り、軍事色の強い歌謡曲が増えてくる。

戦にかけてのごく短い期間であつたと思われる。だんだんと歌詞の内容が苛烈になつてくることからそのことが分かる。それより以前は、戦時中であつても、こんな曲を発売してしまつて大丈夫だったのかどちらが心配するほど、潰刺とした曲や歐米調の曲も見られるのである。

(三)

それでも、昭和十六年十二月八日の開戦直前まで、数は少なくなるが、欧米の軽音楽が発売され続けていた。

ここまで書いて何気なく手元にあつた昭和十四年発売の雑誌

「ミュージック・ライン」九月号をパラパラとめくつてみた。そうしたら上述のことを裏付けるような広告文句が目に飛び込んできた。「米国より新譜入荷独占販売。帝都一のジャズ鑑賞店。直輸入ジャズ本邦一蒐集。下谷区竹町『アメリカ茶房』(傍点は筆者)」。

こうした事実は一般の戦後世代がもつてている戦前のイメージとはだいぶかけ離れている。

(四)

いわゆる「ジャズ・ソング」のはじまりは、昭和三年に二村定一が歌つた「アラビアの唄」や「青空」である。この二曲はもともとアメリカの曲に作曲家の堀内敬三自身が歌詞をつけ、編曲してヒットしたものである。それと同時に本場アメリカ、フ

ランス、ドイツから舶来の映画主題歌やジャズが輸入され、米国資本下にあつた二大レコード会社、日本コロムビア、日本ビクター等から洋盤として発売された。

さらに、昭和七年頃になるとジャズ・ソングを日本語と英語の両方で歌える日系一世、三世歌手がもてはやされた。川畠文子、ベティ稻田、チエリー・ミヤノ、リキー宮川といった歌手達である。ちなみに戦時中に「加藤隼戦闘隊の歌」(昭和十八年五月)、「ラバウル海軍航空隊」(昭和十九年一月)を日本ビク

ターチで歌つてヒットさせた灰田勝彦もハワイ出身であり、この頃ハワイアン歌手としてデビューしている。ハワイアン歌手に軍事歌謡を歌わせているところに何か当時のおおらかさを感じてしまう。

当時の日系アメリカ人の歌う流行歌の歌詞カードを見ると、まず、日本語で歌つて、続いて英語で歌うというパターンが多い。いわゆる「ジャズ・ソング」の歌詞をみると、おいおいのぶ子さん、ビールをくれたまえおいおいすみ子さんここにかけたまえ若い日は二度と来ない、機会を捕らえよ！死んだらどうにもならん。だから飲みましょ。

昭和六年頃から日本コロムビアに吹き込むようになつたバトン・クレーンに至つては、ジャパン・アドヴァタイザーや済部長をしていた本物のアメリカ人であった。たどたどしい日本語でアメリカの俗謡に本人が歌詞をつけて愛嬌たっぷりに歌つてゐる。手元には彼の「おいしいのぶ子さん」(昭和六年発売)というレコードがある。その歌詞を一部紹介しよう。

力人であつた。たどたどしい日本語でアメリカの俗謡に本人が歌詞をつけて愛嬌たっぷりに歌つてゐる。手元には彼の「おいしいのぶ子さん」(昭和六年発売)というレコードがある。その歌詞を一部紹介しよう。

このあい、「Drink! Drink! Everyone drink! Drink all your troubles away.……」と英語の歌詞が続く。

(五)

このように、戦前の日本人は大正十三年に排日移民法が成立しそうがそんなことはおかまいなしに、アメリカの大衆文化を好み、それをどんどん輸入していくつた。ディアナ・ダービンの歌つた映画主題歌「オーケストラの少女」のレコードはポリドールから昭和十三年に発売されたが、大変な売れ行きだったようである。その約三年後にアメリカは対日石油・屑鉄輸出禁止措置を発動し、日本にハルノートを突きつけた。そして、それに続く真珠湾攻撃で、アメリカと戦闘状態に入った。それにより、アメリカ大衆文化に対する日本人のいわば片思いの恋はついに終わりをつげることになる。

(続く)